

今回は春風に誘われるような天使が出てくる話を紹介したいと思って探したんですが、辻邦生さんの小説「十二の肖像画による十二の物語」に出てくる天使の話の短くして紹介することにしました。僕は空を飛ぶ人が出てくる話が大好きです。天使が空を飛ぶのは、やっぱり天国が空の彼方にあるからでしょうか。カットはルネサンスの画家ポライウォーロという人の書いた婦人像です。



ヴェネツィア総督の妻のピアンカが、豪壮な邸宅の屋根裏部屋で、その奇妙な人物を見つけたのは、夏の終りに行われる船祭の飾りものを捜していたときであった。床にうずくまったその男は疲れきった表情で、うす汚れた白い衣服を着て、背中に、ぼろぼろになった鷲の羽のようなものを背負っていた。

ピアンカは男に気づいたとき、反射的に大声をあげて誰かを呼ぼうとした。しかし次の瞬間、彼女は自分を取り戻し、戸のとれた衣裳箆笥のかげから、男の様子をじっとうかがった。ピアンカが見ていると、男はしきりと何か言っては溜息をついていた。思い切ってピアンカは男に声をかけた。

「こんなところで、一体なにをなさっているのです」

「ああ、どうも、こんな妙なところでお目にかかる失礼をお許し下さい」

男は外見に似ず、丁寧な若々しい声で、ピアンカの方を見てこたえた。

「ここは、ヴェネツィア総督のお邸だと窺ったのですが……？」

「ええ、総督の邸ですけれど… 」

「ああ、よかった。この町の迷路のような運河で迷ってしまって、総督のお宅を探すのに随分苦労してしまいました。それに天窓から入ってみても、汚い家具ばかりですし、ここがヴェネツィア総督のお宅とは信じられなかったのです」

「だって、ここは、屋根裏のがらくた置場ですもの」

ピアンカは丁寧な男の言葉に安心したが、戸惑った表情ですぐに話題を転じた。

「いま、天窓から入ってきたとおっしゃいましたわね。ずいぶん妙なところから入っていたのね」

「ええ、私は天を飛んでいましたので」「天を飛んでいた？」

「私は、これでも、天使のはしくれなんです」

ピアンカは驚いて男の姿を眺めた。そうわれれば、羽のようなものが背中に生えている。だが、剥製の鷲の羽よりもくたびれた、きたならしい羽である。

「見たところ、とても疲れていらっしゃるご様子ね。それに、ずいぶん汚れていらっしゃる。遠いところから飛んでこられたのですか？」

「私は、コンスタンティノポリスから飛んできたのです。コンスタンティノポリ

スを異教徒たちから守護するため、何日も何日も働いたのです。しかし異教徒側の力は強く、とうとうコンスタンティノポリスは陥落してしまいました」

「その噂はヴェネツィアでも持ちきりです。でも、天使まで加勢しても、あの栄光の都は守れなかったのですの？ 天使は万能ではありませんの？」

「いや、そうおっしゃられると恥かしいが、天使も力を使うためには、十分食べ、十分休まなければなりません。コンスタンティノポリスではもう精も根も尽き果てたのです。異教徒が使用したあの見たこともない大砲の前では、どのしようもなかったのです。人間はもう天使には考えも出来ない悪魔の兵器を手に入れたのです。それで私は、やっとのことでここまで辿りつきました。ヴェネチアでは、コンスタンティノポリスから避難した人々を暖かく迎えてくださると窺ったからです。私もそろそろ天に戻らなければなりません。そのためには体力をつける必要があるのです。どうか私にも手を伸べて、救っていただけませんか？」

天使の話聞いてピアンカは驚いた。まさか神の使いの天使に助けを求められるとは、思ってもみなかった。確かにコンスタンティノポリスは同じキリスト教の国ではあったが、それは遠いローマ時代の話で、東方の国々のキリスト教はギリシャ正教と呼ばれてヴェネチアの人々には異教に等しかった。それに最近避難民が増えすぎて、町は新たな避難民を受け入れないという方針を打ち出したのである。その通達を出したのは他にもない、ピアンカの良人の総督だった。しかしピアンカはヴェネチアを信じてやってきた天使にそのことを言いたくはなかったが良人は裏切れなかった。彼女は暫くためらってから、男に言った。

「お気の毒ですけど、あなたのご希望にそえるかどうか分かりませんの。もちろん、あなたのことは心からお気の毒に思っております。でも、私どもの良人は、それはそれは暮しの一切に口やかましい人で、あなたの希望なさるお食事を運んでこられるかどうか、分かりませんの」

「まさか。私は多くを望みません。スープ一皿と……」

「それが大変なんです。良人は家族が口にするだけの量を、もっとも少い野菜と鳥のがらで取らせませすの。スープが少しでも濃いと、わざわざ台所にいって調べる人なんです」

それは嘘ではなかった。いや全くその通りと言ってよかった。

「ヴェネツィアの大総督が？」

「ええ、それに邸では、ふだん絨毯の上には覆いが掛けてありますし、夜は燭台に火を長いこと付けることはできません。この邸では消費は罪なんです。普通なら棄てる家具もこうして棄てずに取っておいて、船祭の飾りに利用するのです」

「でも、私はごらんのように動けません」

天使は祈るようにピアンカを見上げた。ピアンカには計算高いヴェネチアの人々が、滅んでしまった友好国より、これからの取引先の異教徒のほうを大事にしていることを、心よく思っていなかった。彼女は良人を裏切ることにした。

翌日からビアンカは良人の総督には黙って、貧しい晚餐の中から工面して、少しずつ天使に食事を運んだ。総督の晚餐のスープは水のようになり、燻製の肉は薄紙より薄く切って皿にのっていた。彼は船祭の行事のため忙殺されていたので、そのことを深くは考えなかった。むしろ妻の節約を喜んだ。

やがて天使は元気を取り戻した。抜け落ちた羽も次第に生え揃ってきた。

「あなたがどんなに苦心をなさっているか、よく分っています。こんなに元気になったのもそのおかげです。これで、私は鴨を一羽食べさせて頂ければ、もう天に戻れそうです。どうでしょう、鴨を一羽ご馳走していただけますか？」

「鴨一羽だなんて、良人に内緒で用意するのは、とても無理ですわ。」

ビアンカは腕をよじって言った。

「どうか総督に私のことを話して下さい。私も力がつけば、天使の力を使って総督のお役に立つことも出来るのです。総督は何を一番望んでいますか？」

「船祭の成功でしょう。ヴェネチアの人々が総督に期待しているのはそれぐらいのものです。船祭が成功するかどうかは、その日のお天気にかかっておりますの。だから、良人は毎日てるてる坊主を作っておりますわ」

「それです。そのことをおっしゃって下さい。当日、どんな悪天候でも、私が青空を取り戻してみせましょう。それと引き替えに鴨一羽を貰ってください」

ビアンカから話を聞いた総督は、はじめはひどく立腹した。薄いスープも薄い肉片も、妻の献身的な節約の結果ではなかったのだ。しかし天使が出してきた条件に、彼は気を引かれた。彼は妻の裏切りに目をつむることにした。

例年、船祭りは雨に祟られた。去年などは嵐まで吹いて艀装した船が散々な目にあった。船主やヴェネツィア市民は、天候が不可抗力であることを知りながら、それが総督の非力によるもののように言う。まして今年の船祭りはコンスタンティノポリスを奪取した異教徒に対して、キリスト教国の威信を示す重大な祝祭なのだ。これは何としても成功させなければならぬ。そのためなら、鴨一羽ぐらいは献じてもよからう。むろんできるだけ痩せた、安い鴨を選ばねばならんが...

ビアンカが鴨を皿にのせて屋根裏部屋に上がった時、彼女は、後にも先にもこんな肉のそげた鴨はみたことがないと思った。

天使はすっかり元気になって、天窓の下に座っていた。鴨を見ると、一瞬驚いたような顔をしたが、やがてにこにこ笑って言った。

「なあに、天に昇るために必要なのは、この羽にある栄養です。これで私も天に戻ることが出来ます。ああ、天気のことですね。万事私にまかせて下さい。天使に嘘はありません。総督はご自分のなさったことの結果に、十分満足されますよ」

夏の終りがきて、天候が崩れやすくなった。ヴェネツィアの運河が荒れ騒いだ。

「なあに、当日は素晴らしい天気になるでしょうよ」

総督は、鴨一羽を眼に浮かべながら確信に満ちた口調で言った。

船祭の日、ビアンカが鎧戸をあけると、予想に反して、空はどんより曇ってい

た。雨さえ降りそうな気配だった。階下で総督が口汚く、毒づいていた。

間もなくサン・マルコ広場のほうから楽隊が陽気な音楽を始めた。美しく装った船が、ヴェネツィアの沖に集った。そのとき、突然、雲がまるく切れて、青空が覗いた。しかしそれは、ほんの申訳程度の、小さな笠のような青空だった。

総督席の後にいたピアンカの眼には、そのとき、円い青空のなかを、鳥のように、天使が点になって昇ってゆくのが見えた。総督はまわりの人々に、このまま青空が広がるだろうと言ったが、ピアンカは黙って首を振った。

「あの鴨では、これ以上青空を拓げる力はないわ」

彼女は、天使が消えた後の空をいつまでも見上げながら、そう思った。

コンスタンティノーブルの陥落

黒海とマルマラ海を繋ぐボスポラス海峡、このアジアとヨーロッパの境界に初めて都が築かれたのは西暦330年、時のローマ皇帝コンスタンチヌス1世は、かつてギリシャ風に「ビザンチオン」と呼ばれていた町の名を「コンスタンチノーブル」と改めた。古代の地中海を支配したローマ帝国は滅びつつあったが、彼が建国した第二のローマ帝国はこの地で千年以上の歴史を刻むことになる。

ローマ帝国の、正統派キリスト教を引き継ぐ大聖堂として「聖ソフィア寺院」が建設されるのは、6世紀のユスチニアヌス帝の時代で、高さ55メートル、直径31メートルの巨大ドームを持つ聖堂は、6年の歳月を費やして完成された。ドームの天井には、赤と黒と金を基調としたフレスコ画で描かれた主イエス・聖母・聖者・聖書物語などが、天空の神の御座の象徴として、堂内を荘厳と神秘で包んだ。

この時から皇帝は、キリスト教世界の最高権威を持つ存在となり、11世紀には、東はチグリス・ユーフラテスから、西はアドリア海にまたがる領土を持ち、コンスタンチノーブルの人口は約40万、世界一の商工業都市であった。

しかし、この頃を頂点として帝国の勢いは翳りを見せるようになる。11世紀後半以降、小アジアに侵入したセルジユクトルコに圧迫され、海軍力で地中海を支配したヴェネチアやジェノバの新興国家に交易権を奪われ、さらに14世紀末、小アジア北西部に起こったオスマントルコが目覚しく発展し、バルカンの各地を征服してコンスタンチノーブルを東西から侵略する体勢を整えたのである。

オスマン帝国のメフメト2世が、十万の大軍勢を率いてコンスタンティノーブルを包囲したのは、1453年4月のこと。東ローマ側は守備兵7千という圧倒的に不利の中、2ヶ月近くにわたって抵抗を続けたが、5月29日未明のオスマン軍の総攻撃によって陥落、最後の皇帝コンスタンティノス11世は行方不明となり、ここに古代以来のローマ帝国の系統は完全に滅亡した。

メフメト2世はコンスタンチノーブルを、オスマン帝国の新しい首都として名前を改めた。ギリシャからローマ、そしてイスラムへ。そして今この町は、イスラムの王が付けた名前と呼ばれている。「イスタンブール」と。